

アンコール遺跡を通じた保存・修復研究（その2）

バンテアイ・クデイ遺跡の南「経蔵」¹の復元的研究

Relative chronology on Architectural modifications of Southern Library of Banteay Kdei, Cambodia

1999年9月
荒樋久雄

はじめに

本研究は、バンテアイ・クデイ遺跡の建築群の中でもクメール建築の伽藍^{がらん}構成に重要な建物である南「経蔵」^{きょうぞう}の祠堂^{しどう}に見られる痕跡^{こんせき}から、当初の形式を明らかにし、その後の形態的な変遷を解明するものである。また増拓・改造の痕跡が多く見られるバンテアイ・クデイ遺跡において、南「経蔵」の建設がどの時期に行われたかを類推し、バンテアイ・クデイ全体の増拓・拡張の年代特定および形態変遷の解明の一論拠とすることを目的とするものである。

同遺跡の創立・沿革

バンテアイ・クデイ遺跡は、碑文等の歴史的な史料³に欠け、^{こんりゅう}建立者、^{かいき}開基などは詳らかではないが、ジャヤバルマン 世（1181～1218年？）に由来する寺院で、その様式から12世紀中期から後期頃に建設が開始されたと考えられており、その後に増拓・拡張がなされた痕跡を残している。P. STERNは、この増拓後のバンテアイ・クデイの寺院形態が、その後に建設されたとされるタ・プロム（12世紀後期）やプリア・カン（12世紀後期）の「模範寺院」（le temple pilote）になったと位置付けている。⁵ またJ.DUMARCAYはこの増拓・拡張が13世紀中を通して行われたと^{ひてい}比定⁶している。⁷

¹ 元来、日本寺院建築における経蔵は、主に一切径（いっさいきょう）を収める建物を指すが（岩本浴「日本仏教語辞典」平凡社）、クメール建築における「経蔵」は、フランス語で同祠堂がBibliothequeと呼称されていることに由来し、本来の機能的な意味で、この小祠堂が経蔵であったかどうかは詳らかではない。この稿に関して今後、機会を設けて言及してゆきたい。

² 〔梵 samgharama（僧伽藍摩）の略。僧園・衆園・精舎（しょうじや）と訳す〕寺の建物。特に、大きな寺院。

³ バンテアイ・クデイに関する碑文は下記の論文に報告されている。

Louis FINOT, Inscription d'Angkor VI, Banteay Kdei, BEFE025(3-4), pp354-363, 1925

George COEDES, d'ÉPIGRAPHIE DES MONUMENTS DE JAYAVARMAN VII, BEFE064, p.103, 1951

⁴ (1)寺院を創立すること。また、創立した人。開山。(2)物事のもとを開くこと。(3)宗教の一派を創始すること。また、創始した人。

⁵ Philippe STERN, LES MONUMENTS DU MUSÉE CUMET, p.267, 1965

⁶ ある物が一定の物として認められない場合、他の類似の物と比較して、その性質がどのようなものであるかを判断すること。

⁷ Jacques DUMARCAY DOCUMENTS GRAPHIQUES DE LA CONSERVATION D'ANGKOR 1963-1973, p.50, Paris 1988

規模・構造・現状形式

同遺跡の中央伽藍は、ちょうど「田」の字型に回廊が配されており、その各交点には塔が聳える。南「経蔵」は「田」の字型に四分割された南東の中庭に位置し、北東の中庭に位置する北「経蔵」と対をなす。規模は南北約 4.5m、東西 7.1m で、東西に対して縦長平面である。同「経蔵」の平面構成は、西側の玄室⁸と東側の主室の 2 室よりなり、西側を正面入口としている。⁹

玄室は、南北壁面に窓を穿ち、東側に主室に通じる開口部を開く。主室は南側壁面にのみ窓を穿つ。玄室、主室とも、上部架構¹⁰は迫り出しアーチ構造となっている。上部構造に関しては、主室の中央上部には塔が聳え、クメール建築の「経蔵」の建築形態においても特異な例を示している。しかし、この塔も下部を残し殆ど形状を止めないほど崩壊している。また南側側面妻飾りは付柱の足元のみを残し完全に消失し、東側背面に至っては最も崩壊が激しく、偽窓より上部は妻飾りの片鱗を残すのみで、内部のアーチが見通せる状態となっている。

建築変更・改造痕跡の考察

この様に、長年を通しての部材の崩落、崩壊などにより、旧形を把握することさえも困難なのが現状であり、崩落した部材も 1920 年代の除去作業の結果¹¹、簡単に発見することは不可能な状況になっている。しかし、同祠堂の実測を通しての観察により、以下の個所に関して建築変更、改造痕跡等を発見するに至った。

表-1 南「経蔵」に見られる建築変更・改造箇所一覧表

建築変更・改造箇所	概要
①塔 ②主室上部構造 ③南「経蔵」西側壁面 同妻飾り	<p>A 主室上部に残された瓦状の文様 : 現在、主室上部には塔が配され、南北側には側壁の妻飾りが取り付けられ、注意してみると、西側壁ならぬと東側壁の妻飾りとは、玄室上部の壁面部分と同様の瓦状の文様が削り取られずに残されている。</p> <p>B 南側側面壁に残る軒廻りのレリーフ : 南側側面壁に穿たれた三つの穴と同じ高さには、軒廻りレリーフを構成していた押き彫りの彫り取られずに残されている。同時に、同壁面の主室窓の開口に穿たれた窓廻りのうち、北壁に重なる部分が意図的に削り取られている。</p> <p>C 側壁と側面窓の不整合 : 側面窓を構成する各石材は、主室の側壁石材と異なるものが多く、壁の垂直な目地にて側壁と側壁が各々分割され、構造的に結合されていない。此外、北「経蔵」の同位置の側壁は側壁石材より一体構造で構成されており、構成手法を異にする。</p> <p>D 側壁面に穿たれた三つの穴 : この三つの穴が一種の換気のためのものとしても、その外側には、側壁のマダサが二次的に取り付けられ、丁度その穴を塞ぐ結果となり、その本来の機能を果たさなくなってしまう事が分かる。</p>
④南「経蔵」西側飾石 ⑤南「経蔵」北側テラス	<p>南「経蔵」の西面に敷かれた飾石が、同「経蔵」の基礎の下部部材を透す形で敷き詰められている。これと同様の層位関係は、南「経蔵」の北側に位置するテラスと同「経蔵」との間の層位関係にも見られ、層位的に見た結果より、西側飾石ならぬ北側テラスが南「経蔵」より後に施工された事が判明する。</p>
⑥主室南側の窓 ⑦玄室の南北両側の窓	<p>現在、主室の南側の窓が焼成レンガにより塞がれ、その外側には窓枠が壊れていた痕跡を残すが、玄室の南北に設けられた二つ窓の周囲にも、この跡が焼成レンガにて塞がれた跡をわずかに残す事より、ある時期、この「経蔵」に設けられた三つの窓全てがレンガにより塞がれ、表面を漆喰にて塗り込められていた事になる。</p> <p>しかし、主室の下部の窓枠材の上部には、外側より直径 2~3 cm 程度の穴が 5 つ、同玄室のものには穴が 3 つ、均等な間隔で一並列状に穿たれており、その結果、この窓が塞がれる以前は、当初、そこに格子が取り付けられていたことが判明する。</p>
⑧西側正面壁面に穿たれた木造梁埋め込み	<p>西側正面ファサードの妻壁の下段の火災文様のあたりに、木造梁埋め込みが取り付けられていた痕跡と見られる穴が存在する。この痕跡に関して、この梁埋め込みが当初のものか、後補のものかどうかが、現状では判断する材料に欠く。</p>

⁸ 古墳の中の棺をおさめる室。玄宮

⁹ 「経蔵」の入口は西側で、遺跡全体の入口を東側とする方向と全く逆方向にあり、クメール建築における「経蔵」と呼ばれる建物を定義する際の重要な要素である。

¹⁰ 骨組みとなる部材を結合して組み立てた構造物。

¹¹ 拙稿「バンテアイ・クデイ『日誌』の研究」、1998 年度日本建築学会梗概集

塔 主室上部構造 南北側面控え柱¹²ならびに同妻¹³面 南「経蔵」西側の舗石¹⁴ 南「経蔵」北側に位置するテラス 玄室の南北側面の窓 主室の南側面の窓 西側正面妻面に残された屋根痕跡 これらの各項目に関して、それぞれの考察を行い、纏めたものが表 - 1 である。

北「経蔵」との比較

次に南「経蔵」と、その対をなす北「経蔵」を比較すると、両者は形態的に同部類に属し、一瞥したのみではその違いを判断し難い。しかし、配置 規模 形状 石材組積 窓および側面の穴 裝飾モチーフ 内部天井等に違いが見られる。北「経蔵」は、建立当初から塔が建設されているほか、形態的にも南「経蔵」よりも多少、後の形態を示している。¹⁵

南「経蔵」の形態的変遷

上記の考察を再度、南「経蔵」の形態的な変遷に関して、纏め直すと、表 - 2 に見られるように年代順に四期に区分することが可能となる。

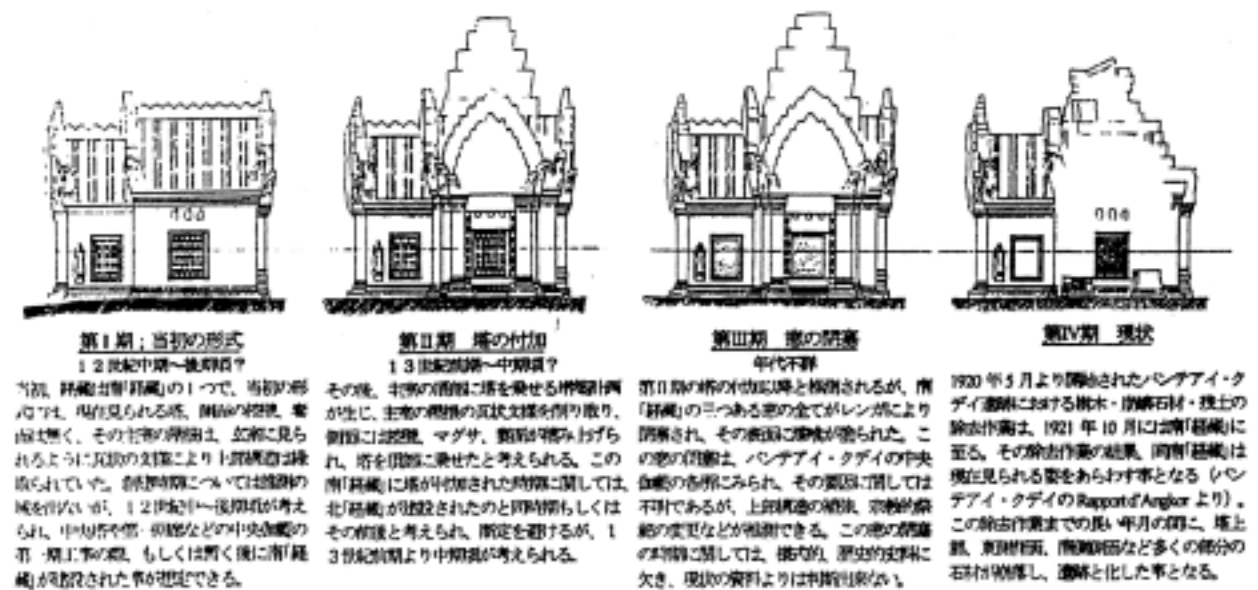


表 - 2 南「経蔵」の形態変遷

¹² 控え柱：堀・門などが傾くのを防ぐ、支えの柱。

¹³ 端・妻（つま）：（1）もののはし。特に、建物の端。建物の側面や棟の方向に直交する面。（2）切妻や入母屋（いりもや）造りの屋根の側面の三角形の壁面のこと。

¹⁴ （1）道路に敷いてある石。敷石。（2）道路の舗装として敷く砂利や小石。バラスト。パラス。

¹⁵ 片桐正夫 / 重枝豊 / 神宮太「ジャヤバルマン7世時代におけるクメール宗教建築の造営手法に関する研究」（カンボジア文化復興第13号）上智大学アジア文化研究所

まとめ

以上、バンテアイ・クデイ遺跡の南「経蔵」の形態的変遷に関して考察を試みたが、結論として、バンテアイ・クデイ遺跡の建立当初は、経蔵は南「経蔵」一つしかなく、その建築形態も、(タ・プロムならびにプリア・カン北伽藍の南「経蔵」に見られる様な)塔のない形式を採っていたことが判明した。その後、バンテアイ・クデイに対する新たな建築計画(塔の付加)に伴い、南「経蔵」にも塔が付加されることとなり、それと前後して、北「経蔵」が新たに建てられたと考えられる。

今回は、南「経蔵」の形態的変遷の解明に焦点を絞り考察を行ったが、今後、バンテアイ・クデイ遺跡の他の建物も詳細に考察を進めることにより、増拡・改造痕跡の多いバンテアイ・クデイ遺跡全体の形態的変遷を明らかにすることが必要とされる。

謝辞

本研究を行うにあたっては、石澤良昭教授(上智大学外国学部長)ならびに Bruno BRUGUIER 氏(Membre de l'Ecole Francaise d'Extreme Orient)よりご指導頂いた。ここに厚くお礼を述べたい。

本稿は「バンテアイ・クデイ遺跡の南「経蔵」の復元的研究 アンコール遺跡を等した保存・修復研究(その2)」(日本建築学会学術講演梗概集(九州)1999年9月 荒樋久雄)をベースに加筆・修正したものである。